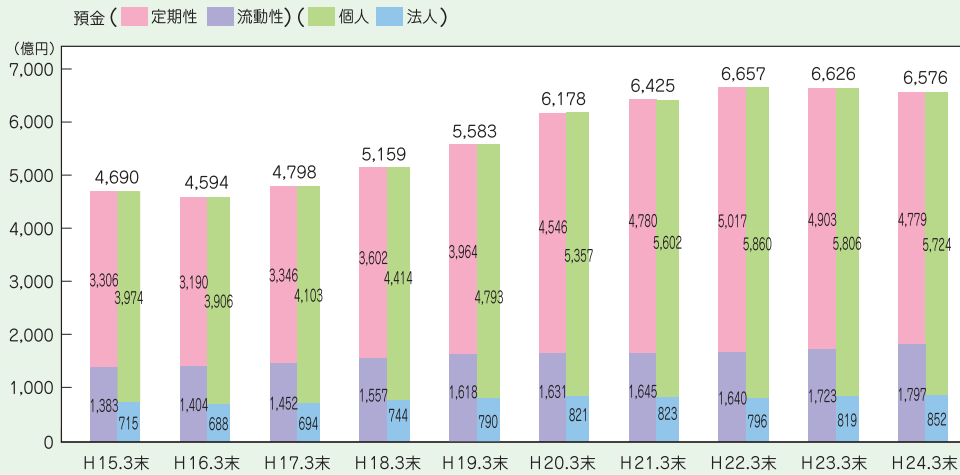


● 預 金

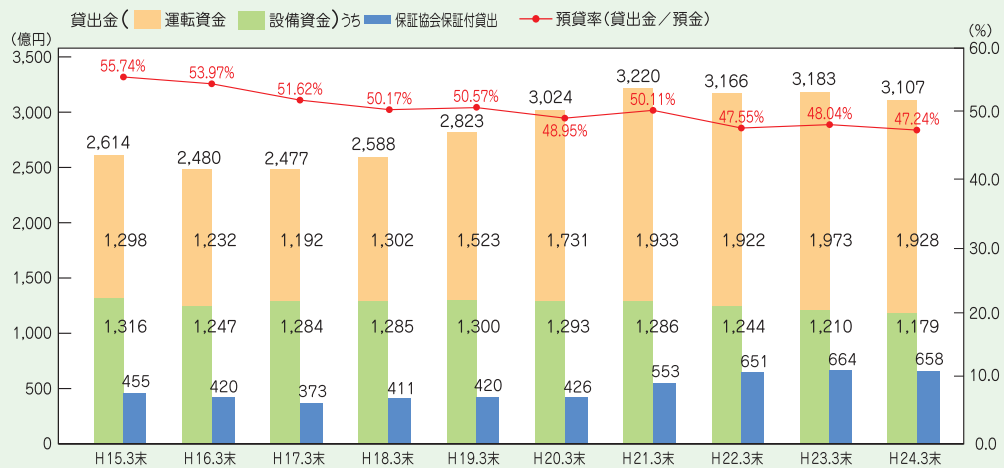


ここ10年間の預金の推移を見ますと、平成17年3月末から平成22年3月末までの6年間は大変好調な伸びを示しましたが、平成23年3月末からは減少に転じています。

預金の課題は、流動性預金及び法人預金の構成比率を上げることです。

平成24年3月末の預金残高は、全国271信用金庫中第49位、兵庫県下11信用金庫中第4位となっております。

● 貸出金と預貸率

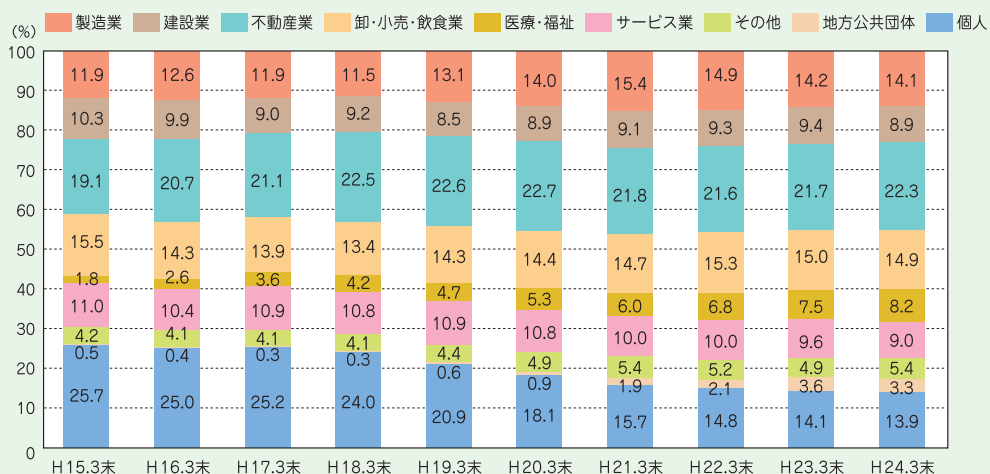


貸出金の10年間を見ますと、平成18年3月末から平成21年3月末までの4年間は順調に推移しましたが、平成22年3月末から足踏みをしながら減少傾向にあります。

貸出金の増強に一層努力しなければならないと奮起しているところであります。

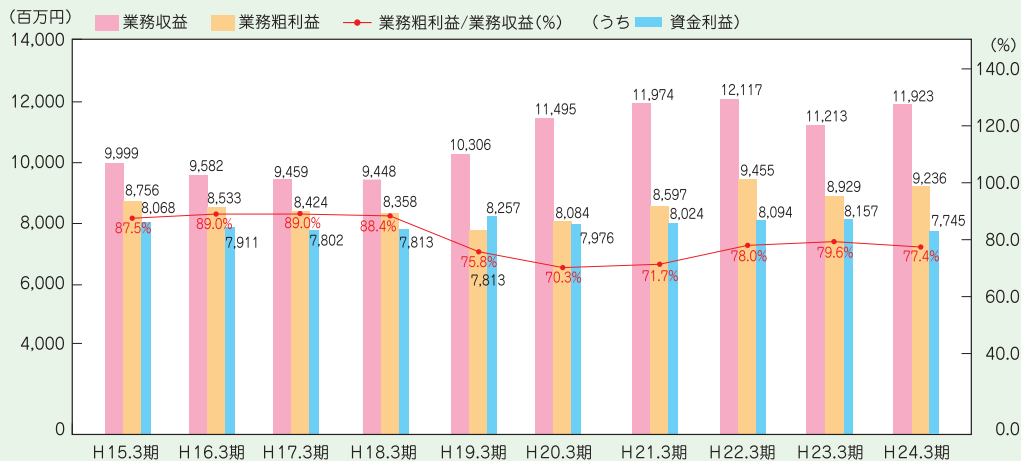
内訳を見ますと、設備資金は伸び悩んで平成20年3月末以降は減少しています。保証協会保証付融資についても伸び悩みの状態です。

● 貸出金の業種別構成比の推移



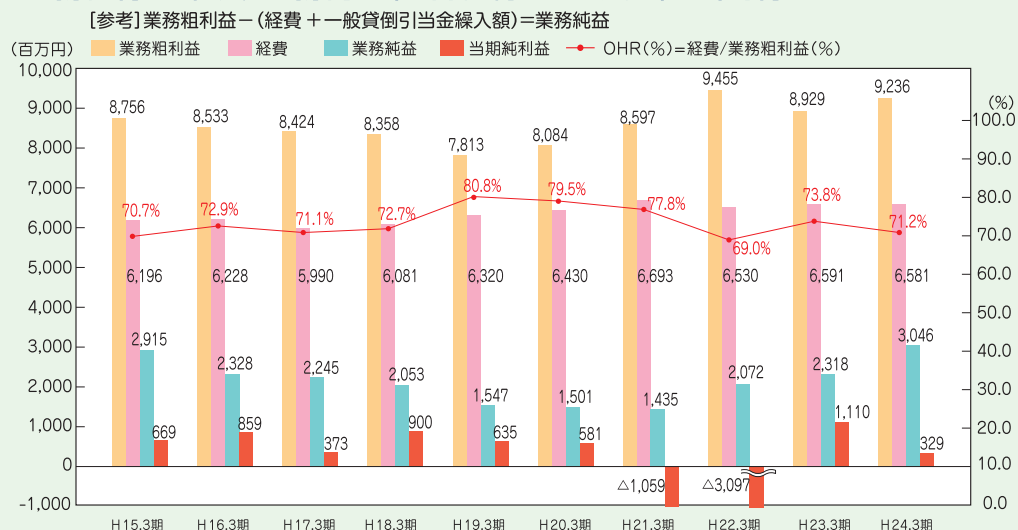
貸出金の業種別構成は、医療・福祉(介護もここに含まれます)が10年間一貫して構成比を上げてきています。個人は、住宅ローンが大部分ですが減少が続いております。個人向け貸出金について住宅ローン以外の消費者ローンにも力を入れてまいります。

●業務収益、業務粗利益（うち資金利益）



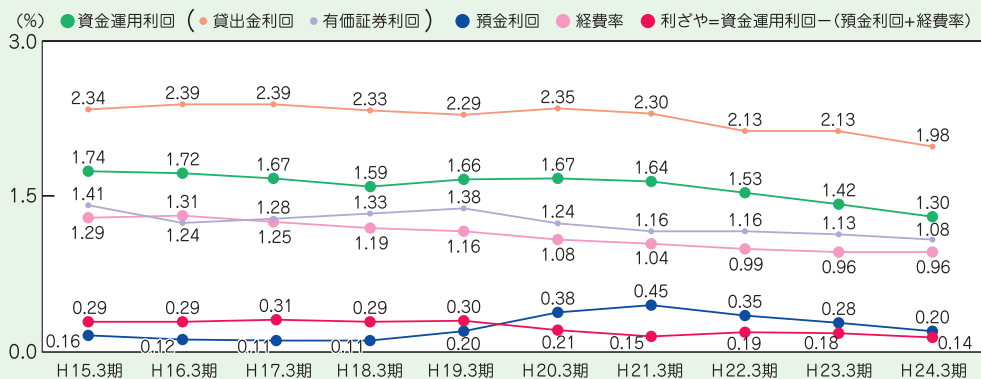
一般企業の売上げに当たる業務収益(貸出金利息収入、有価証券等運用収入、役務取引収入等)は、平成23年3月期に比べ増加していますが、これは債券の売却収益が寄与したためです。
 業務粗利益(売上一預金支払利息等原価)は、債券の売却による収益はあったものの、東京電力債の売却損を計上したため平成23年3月期に比べ微増となりました。
 金庫の中核的業務から得られる資金利益(貸出金と有価証券運用から発生する利益-預金支払利息)は、平成23年3月期に比べ大きく減少しました。これは貸出金の不振と金利の低下が主な原因です。結果、業務粗利益率も低下しました。

●業務粗利益、経費、業務純益（業務粗利益-経費等）、当期利益



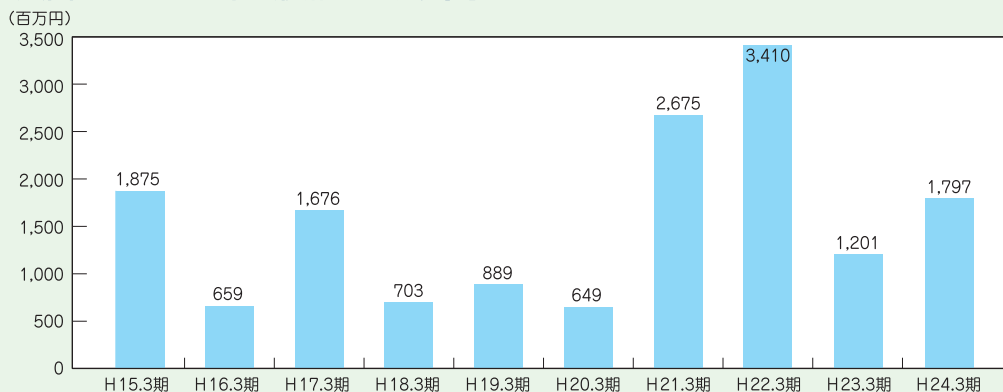
業務粗利益は債券売却益も寄与し、平成22年3月期に次いで高い水準となりました。
 経費は圧縮に向け努力した結果、平成23年3月期より減少しております。
 業務純益は債券売却益が寄与したため大きく増加しましたが、不良債権処理費用(個別貸倒引当金繰入額、債権償却額等)が多額となったため当期純利益は小額となりました。
 収益増強、経費削減、不良債権処理費用の減少に全力を挙げてまいります。

●資金運用利回（貸出金利回+有価証券利回）、預金利回、経費率



各種利回りは上のグラフの通りです。
 利回りは、市場金利の低下により総じてここ数年低下基調で、金融機関にとっては非常に厳しい状況です。
 貸出金利回や有価証券運用利回は一段と低下しました。預金利回も低下しました。
 経費率は、前年度比横ばいであり、経費率を低減していくことが喫緊の課題であります。

●貸出金にかかる不良債権処理費用等

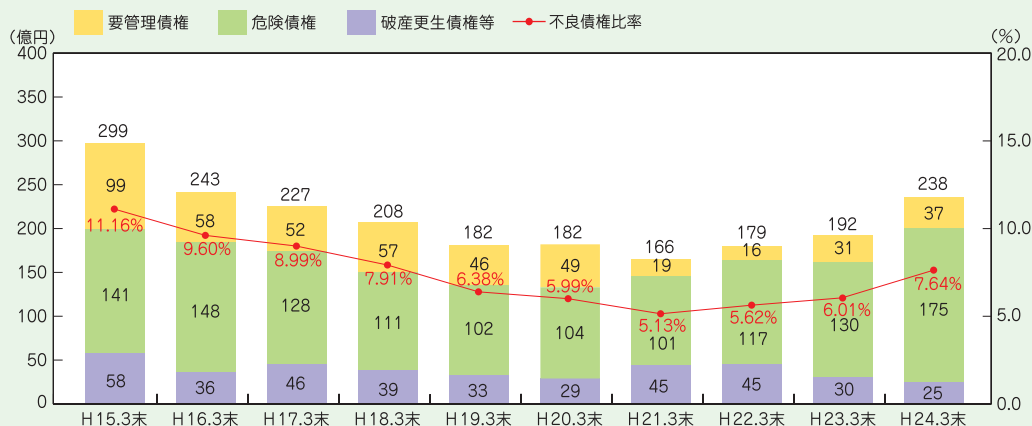


貸出金にかかる不良債権処理費用等とは、一般貸倒引当金純繰入額、個別貸倒引当金純繰入額、債権償却額等の合計額です。すなわち、将来の発生を見込んで現時点で算定した損失見込額、及び回収不能となって確定した損失額の合計です。

平成24年3月期は、この10年を見ても不良債権処理費用等は高い水準となっています。貸出債権の不良化を防がなければならないのは当然のことですが、同時に将来のために引当を十分に行うことも重要です。

いずれにしろ、不良債権処理費用等がこのところ収益圧迫の一つの要因になっています。

●不良債権（金融再生法上の開示債権）の内訳と不良債権比率

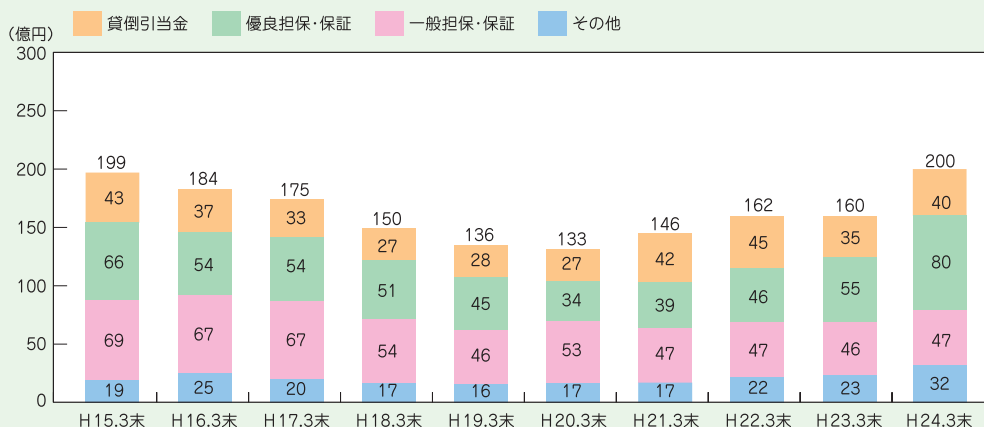


不良債権は、要管理債権、危険債権、及び破産更生等債権に分類されます。破産更生等債権については未保全額に相当する額を個別貸倒引当金として計上しますので会計上は損失処理を完了していると言えます。あとは担保処分等を行うこととなります。

要管理債権と危険債権の合計額は、平成21年3月末を底に毎年増加しています。これらの債権に対して最近の実績から算定した率で引当金を積むことにより将来のリスクに備えるとともに、貸出先に対しては経営の改善に向けた格段の努力をお願いしています。

貸出先との率直な意見交換により良い結果を得ることができるよう態勢整備を図りつつ全力を投入しています。

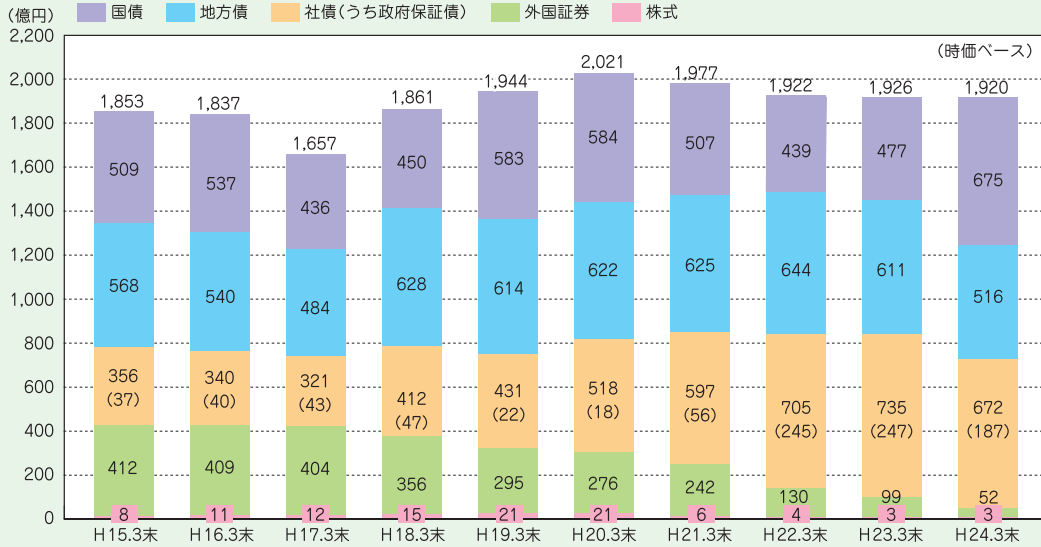
●不良債権（要管理債権を除く）の保全状況



平成24年3月末現在の不良債権（要管理債権を除く。）は200億円ありますが、その保全状況は上の通りです。

貸倒引当金や担保・保証で保全されている額が168億円です。残り32億円はこれまでの実績から見て回収可能と判断される額です。

●有価証券の種類別保有状況

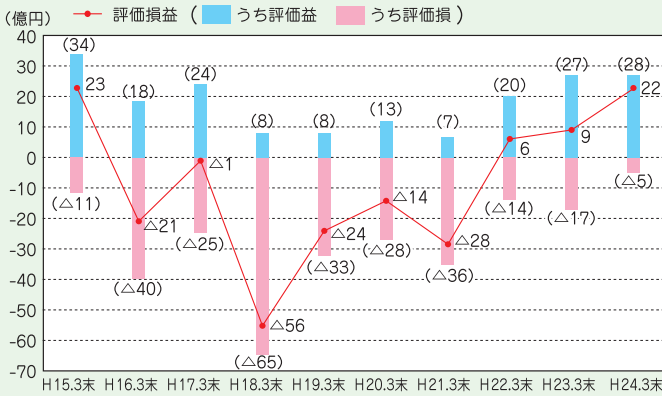


国債、地方債、政府保証債で有価証券全体の70%以上を占めており、安全性に配慮した運用を行っています。

地方債・社債は収益計上のための売却や償還により減少、外国証券は償還により減少しましたが、他方、国債の買い増しを行ったことから、有価証券運用の総額に大きな変化はありません。

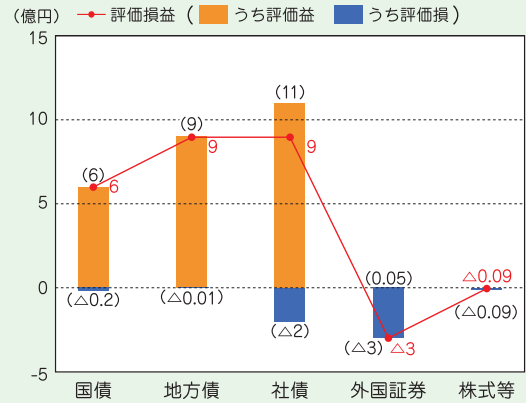
平成24年3月期には東京電力債を22億円売却し、期末残高は約8億円であります。

●有価証券の評価損益の推移



平成24年3月末現在、評価益(市場価格が簿価を上回っているもの)の出ている有価証券の合計は28億円、評価損(市場価格が簿価を下回っているもの)の出ている有価証券の合計は5億円です。全体で差引き23億円の評価益となっております。

●有価証券の種類別の評価損益

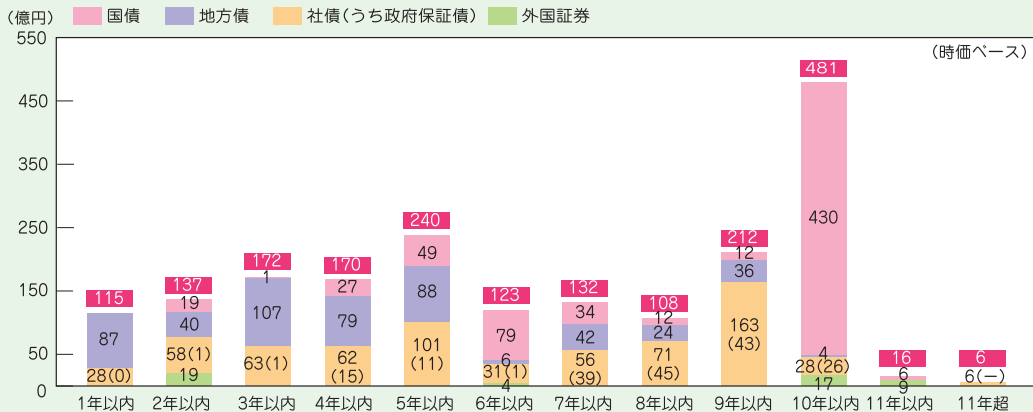


有価証券の種類別に平成24年3月末の評価損益を示したものです。

国債及び地方債については評価益が出ており評価損はほとんどありません。

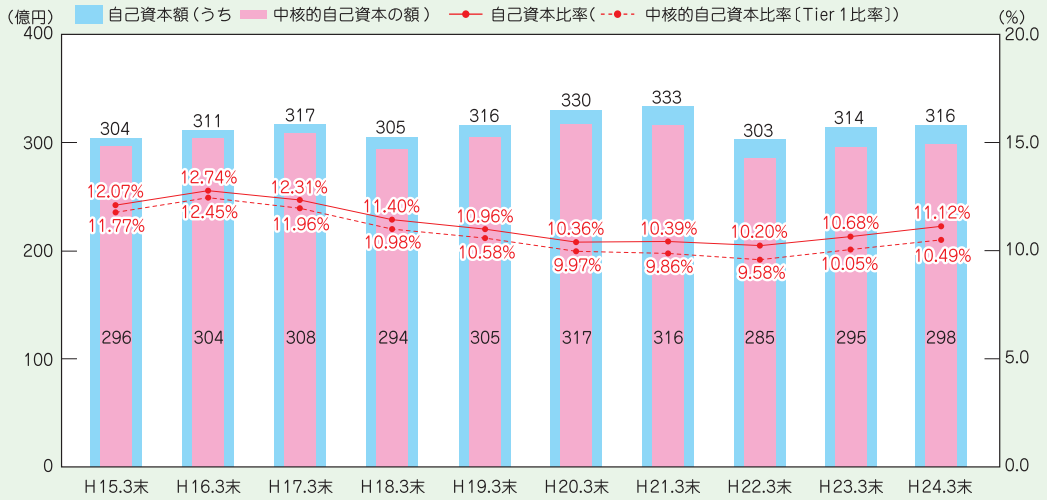
外国証券は評価損が出ていますので市況を見ながら適宜処分したいと考えています。

●債券(償還までの期間別に見た残高)、平成24年3月末現在



有価証券のうち株式を除いた債券について、その償還までの期間別に保有残高を示したものです。10年を超える長期投資はリスクが高いと考え、保有残高を減らしています。

●自己資本と自己資本比率(信用金庫単体)



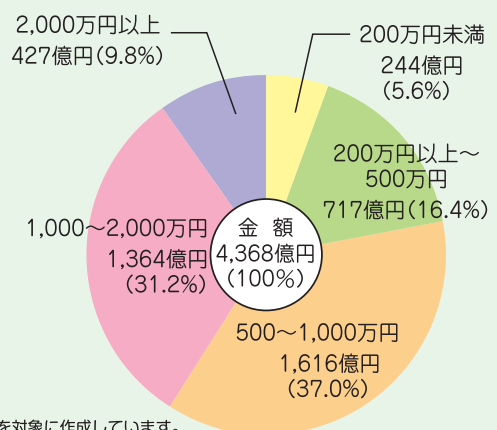
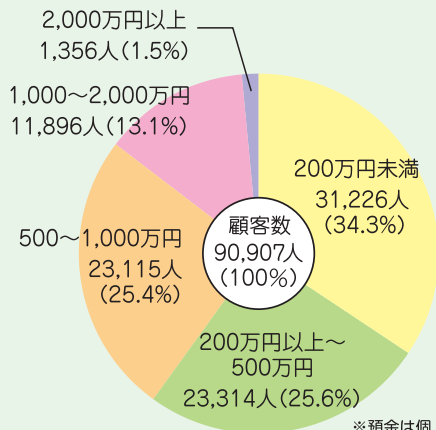
	H15.3末	H16.3末	H17.3末	H18.3末	H19.3末	H20.3末	H21.3末	H22.3末	H23.3末	H24.3末
リスクアセット	2,519	2,444	2,573	2,676	2,883	3,185	3,210	2,976	2,941	2,845
(参考)貸出金	2,614	2,480	2,477	2,588	2,823	3,024	3,220	3,166	3,183	3,107

自己資本比率は、前年度より0.44%上昇して、11.12%となりました。
 当金庫の自己資本は、ここ10年、300億円強で上下していますが、国内基準である4%を大きく上回り、経営の健全性・安全性を十分堅持していると考えております。
 これからも、事業活動を通じて上げる収益による資本の積み上げ等により自己資本の充実を図ってまいります。

預金者のプロフィール

(平成24年3月31日現在)

〈個人定期預金の残高階層別にみた顧客数と預金額〉

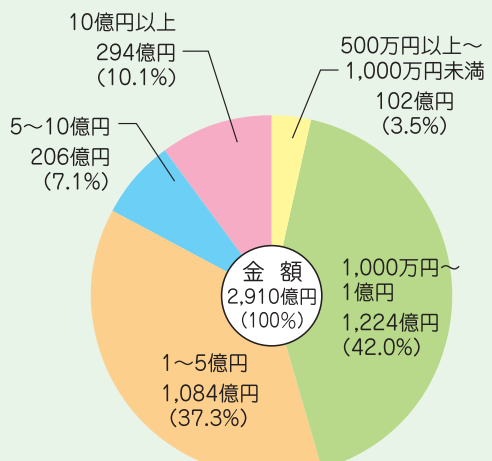
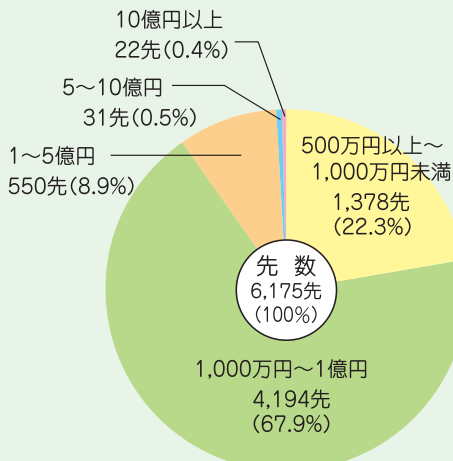


※預金は個人の定期預金残高を対象に作成しています。

貸出先のプロフィール

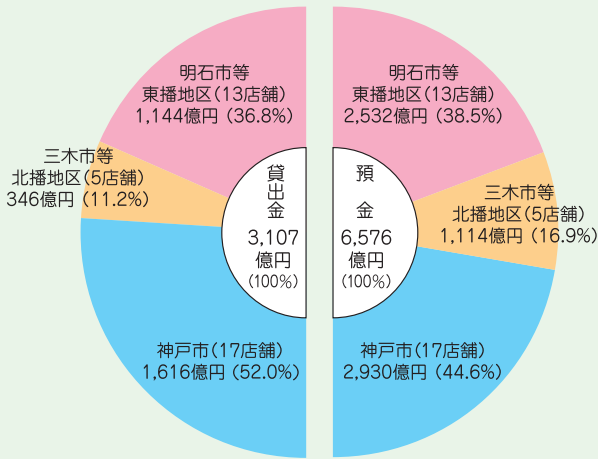
(平成24年3月31日現在)

〈貸出金の残高階層別にみた先数と金額〉



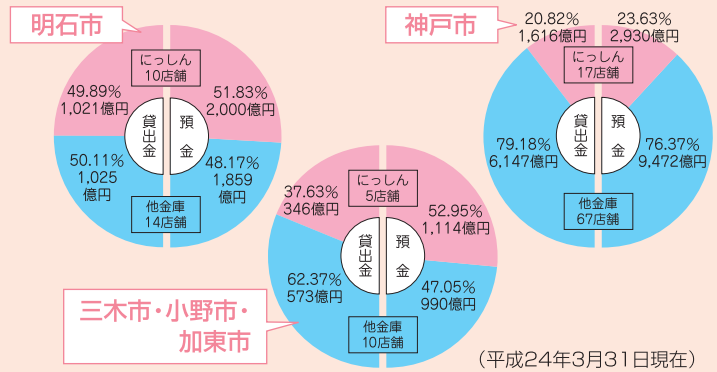
※貸出金は残高500万円以上の会員を対象に作成しています。

〈貸出金・預金の地域別構成〉 (平成24年3月31日現在)

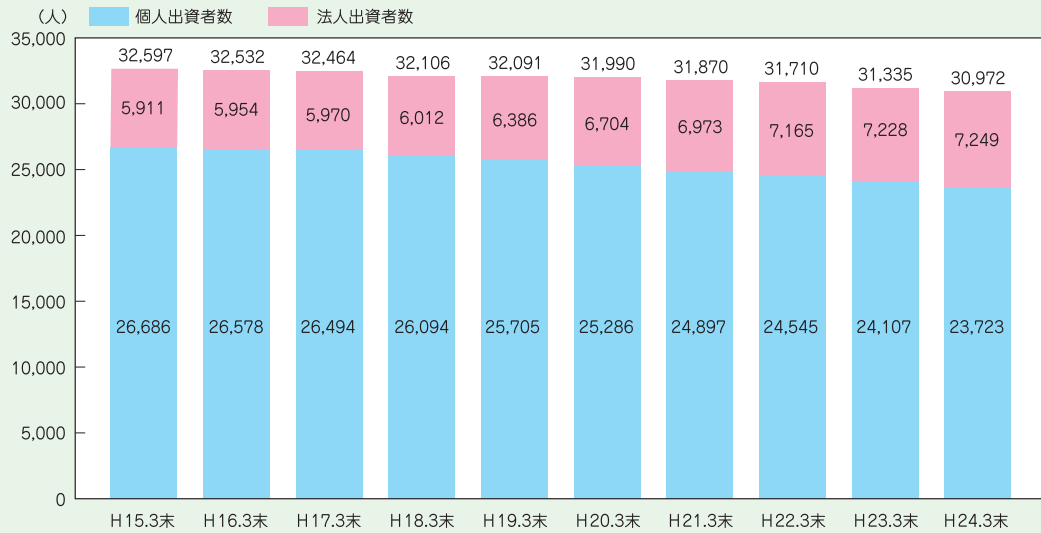


信用金庫業界での〈にっしん〉のシェア

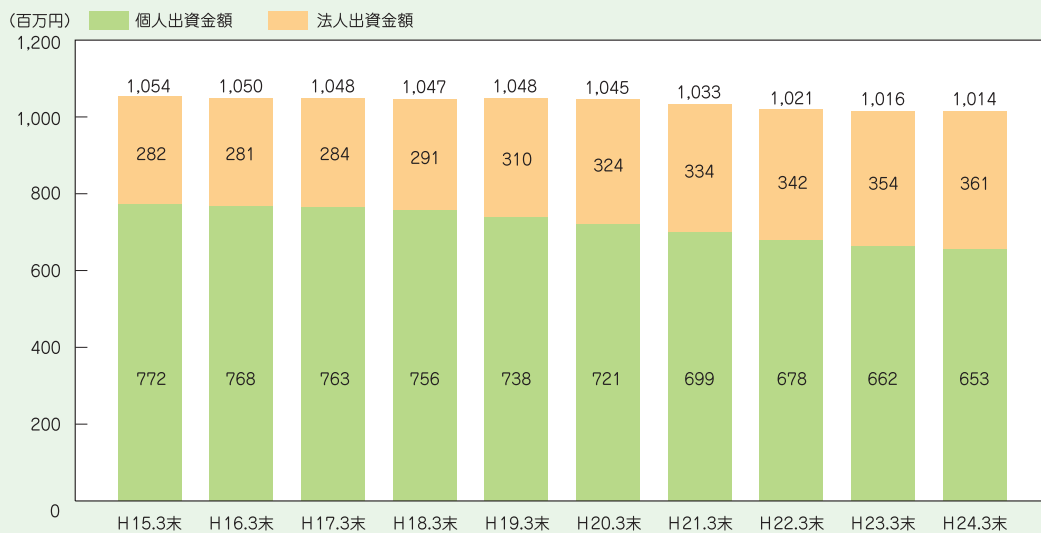
〈にっしん〉の営業地区内には多くの信用金庫が店舗を出しています。これらの信用金庫が保有する預金・貸出金中に占める〈にっしん〉の割合は次の通りです。



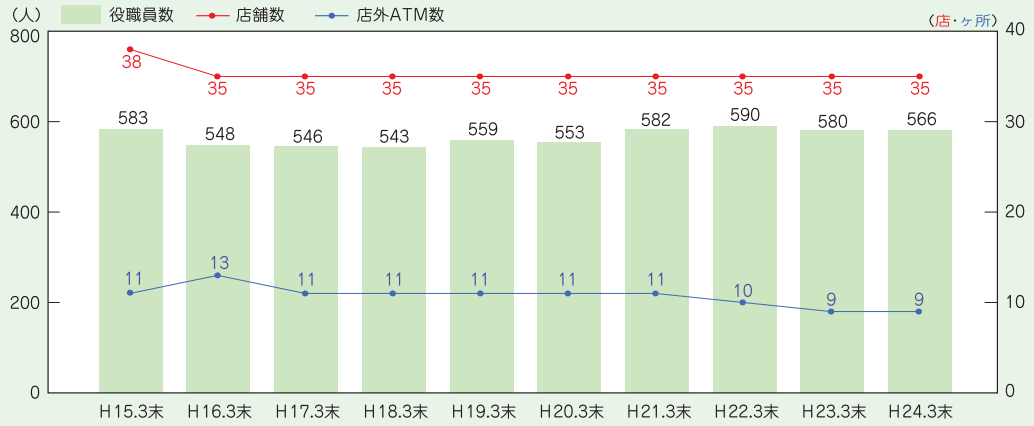
● 会員数



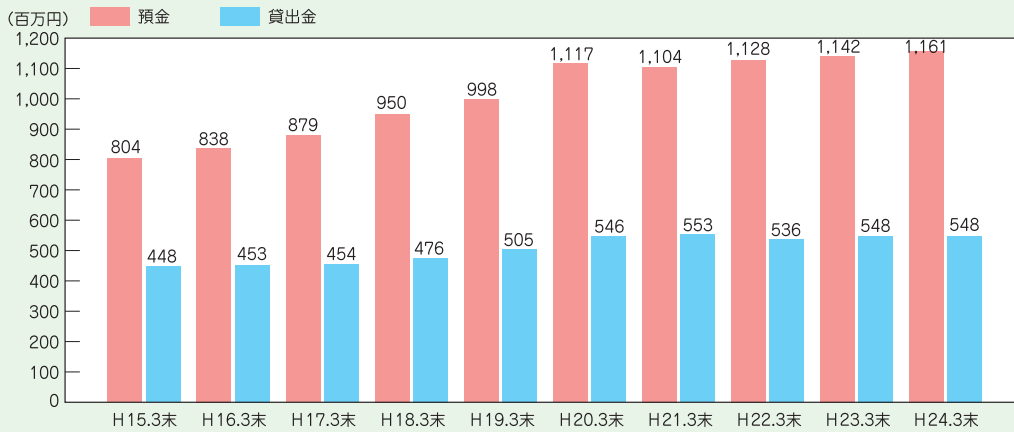
● 出資金額



● 役職員数と店舗数

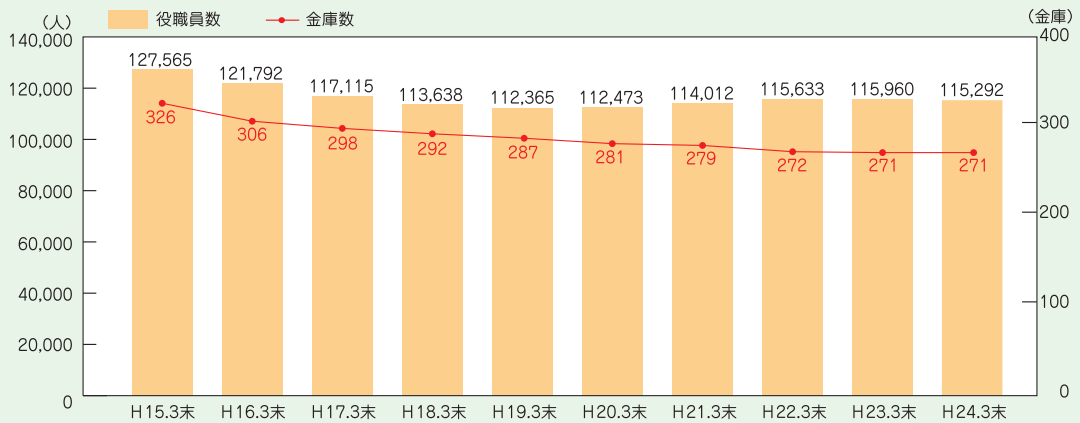


● 役職員1人当りの預金と貸出金



信用金庫業界の動き

● 全国の信用金庫役職員数と金庫数



● 全国における信用金庫の預金と貸出金

